第 55 回日本アフリカ学会学術大会参加・発表

森　洋明

標記大会が、5 月 26 日から 27 日にかけて、北海道大学において開催され、「日本の新宗教によるアフリカ進出―天理教の事例より―」と題して口頭発表を行った。

日本とアフリカの交流は政治や経済、開発援助など、今日多岐にわたっているが、そのなかで日本の新宗教もアフリカ大陸に進出し、布教伝道を目的にさまざまな形でアフリカとの交流を行っている。『ルポアフリカに進出する日本の新宗教』（上野庸平、花伝社、2016 年）には「幸福の科学」「真如苑」「崇教真光」「統一教会」「創価学会」の布教伝道や日本から遠く離れたところで「純粋な気持ちで信仰するアフリカ人」が紹介されている。

そこで発表では、同書で詳しく触れていない「天理教」を取り上げ、天理教がコンゴ（共和国）で展開している布教伝道の様子を紹介するとともに、その活動の諸相を異文化間の交流という視点で「受容」と「変容」を軸にした考察を行った。

天理教のコンゴ伝道の歴史は、教会本部主導の下で日本人布教師が中心となって活動を進めてきた 1990 年頃までと、教会活動が前面的に停止に追い込まれた 90 年代の内戦（1993 年、1997 年、1998 年）を経て、親の信仰を受け継ぐ人たちが中心となって新たに教会を復興していく 2000 年以降とに大きく二つに分けられる。前半は、それまでのコンゴ社会には存在しなかった「神」や「救済」、あるいは、教義に依拠する見方や考え方、価値観をコンゴ人信者が受容していこうとする過程であり、後半は、親世代の信仰の影響を受け、子どもの頃からすでに教会や布教所に通うことによって、天理教の宗教的環境のなかで育った人たちが、コンゴの文化や宗教観と融合させ、変容させていく過程であると言える。

発表では、コンゴという遠く離れた地で天理教がどのように受け入れられたのかを、社会や文化、宗教などさまざまな側面から、その受容のあり方について考察するとともに、それが 2000 年以降にどのように変容してきているのかを、最近のコンゴの教会で展開されている活動の画像や映像を交えて振り返ってみた。

第 60 回印度学宗教学会学術大会に参加・発表

澤井治郎

標記大会が、5 月 26 日から 27 日にかけて、宮城県の東北大学において開催された。同学会は、インド哲学、仏教学、宗教学に関わる研究者が集い、毎年研究発表を行っている。今回の研究発表では、半数あまりがインド哲学ないし仏教学に関連するものであった。昨年参加したときは、被災地域の調査や東日本大震災を機に展開した宗教横断的な被災地支援活動に関する報告が多かったが、今年はそうした発表がかなり減ったのが印象的であった。

筆者は、「天理教と教派神道」という題目で発表した。教派神道とは、明治以後、国の祭祀とされた国家神道（神社神道）とは別に、教派として公認された神道系教団を指すが、天理教は明治 41 年の一派独立によって、その一派に加わった。それから、第二次大戦の終結まで、国の宗教政策によってその枠組みの中で活動することになった。

その後、「復元」によって教義や祭儀は元に復されてきたが、葬儀式や天理教内の施設の中には一派独立に際して制定されたものも少なくない。この発表のなかでは、天理教がその歴史において教派神道の一派となったこと、その一派として約 40 年間（教派神道連合会の脱会までなら約 60 年間）活動してきたことは、現在の天理教にとってどのような意味を有しているのかを検討した。

『グローカル天理』合本のご案内

2010 年から 2016 年に出版された『グローカル天理』の合本を頒布しています。これは各 1 年分（12 号分）を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです（頒価は 200 円）。

研究所事務室に直接お越しいただくか、郵送にて頒布しています。

合本はご注文を受けて製本しておりますので、研究所事務室にお越しの際は、**必ず事前に電話、FAX、もしくは E メールでご連絡ください。**

（裏表紙に連絡先が記載されています。）

天理大学おやさと研究所

平成 30 年度公開教学講座

信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（4）

場所：天理教道友社 6 階ホール
時間：午前 10 時～ 11 時 30 分

4 月 25 日（水）　高見宇造
　　56「ゆうべは御苦労やった」（終了）
5 月 25 日（金）　岡田正彦
　　61「廊下の下を」（終了）
6 月 25 日（月）　佐藤孝則
　　64「やんわり伸ばしたら」
9 月 25 日（火）　森　洋明
　　62「これより東」
10 月 25 日（木）　澤井治郎
　　59「まつり」
11 月 25 日（日）　堀内みどり
　　52「琴を習いや」

＊事前予約不要・来聴無料、お車でのご来場はご遠慮下さい。